

仏マルシェ 自立運営に

弘大学生団体 行政支援頼らず来月実施

弘前

フランスゆかりの物や店、文化を弘前市内に見いだして、弘前の魅力を広くアピールする弘前大学の学生団体「弘前グローバル・アクション」が5年目の活動に入った。毎年9月に土手町で実施している青空市「フランス日和マルシェ」は今回初めて行政支援に頼らず、資金を学生たちで集め開催する。8月末には欧風風情を伝える「手回しオルガン」のワークショップを実施するなど、学生たちは「街の人とともにアイデアを出し合いながら魅力を引き出し、地域をもっと元気にしたい」と意気込みを見せる。



「街の人と盛り上げを」

9月のマルシェ運営へ向け、意欲を見せる「グローバル・アクション」のメンバー

団体は、弘前人文学部(現人文社会科学部)の「弘前×フランス」プロジェクトの履修生が2015年度結成。フランス語の名前がついたレストランや花屋、美容院などを取材し、リーフレットにまとめている。また、フランス人留学生と市内を歩き、フランス人から見た弘前の面白い点をチェックするなどしている。現在のメンバーは25人。発足した当時から、市の補助事業「まちづくり1%システム」の助成を受けて、マルシェを開催。土手町の蓬莱広場をフランス風市場

(菊谷賢)

に彩り、飲食ブースなどを設置、市民から好評を得てきた。

今年9月のマルシェは9月28日開催。「新たな挑戦の年」として、1%システムの支援を受けず、広告協賛を多く集めるなどして、自分たちで全資金を調達することを決定。街の人、出店者、学生が力を合わせて、多くの人が交流できる場所を提供する。店は、カフェやパン屋、花屋、雑貨など14、15店を予定している。

また、8月31日には、オルゴールのような旋律が特徴的な「手回しオルガン」のワークショップを企画。9月1日には「かみどて朝市」で手回しオルガンを演奏し、朝市を盛り上げるなど、地域のにぎわいづくりに一役買う。

弘前出身の齋藤利帆代表(人文社会科学部3年)は「持続可能な団体となるためには、行政から少しずつ独立することが必要だと思った」と自立運営を決めた理由を説明。「街の人のやさしさを感じながら街を盛

り上げていきたい」と話している。
イベントに関する問い合わせは齋藤代表(メールは I7h1046@hiroasaki-u.ac.jp)へ。